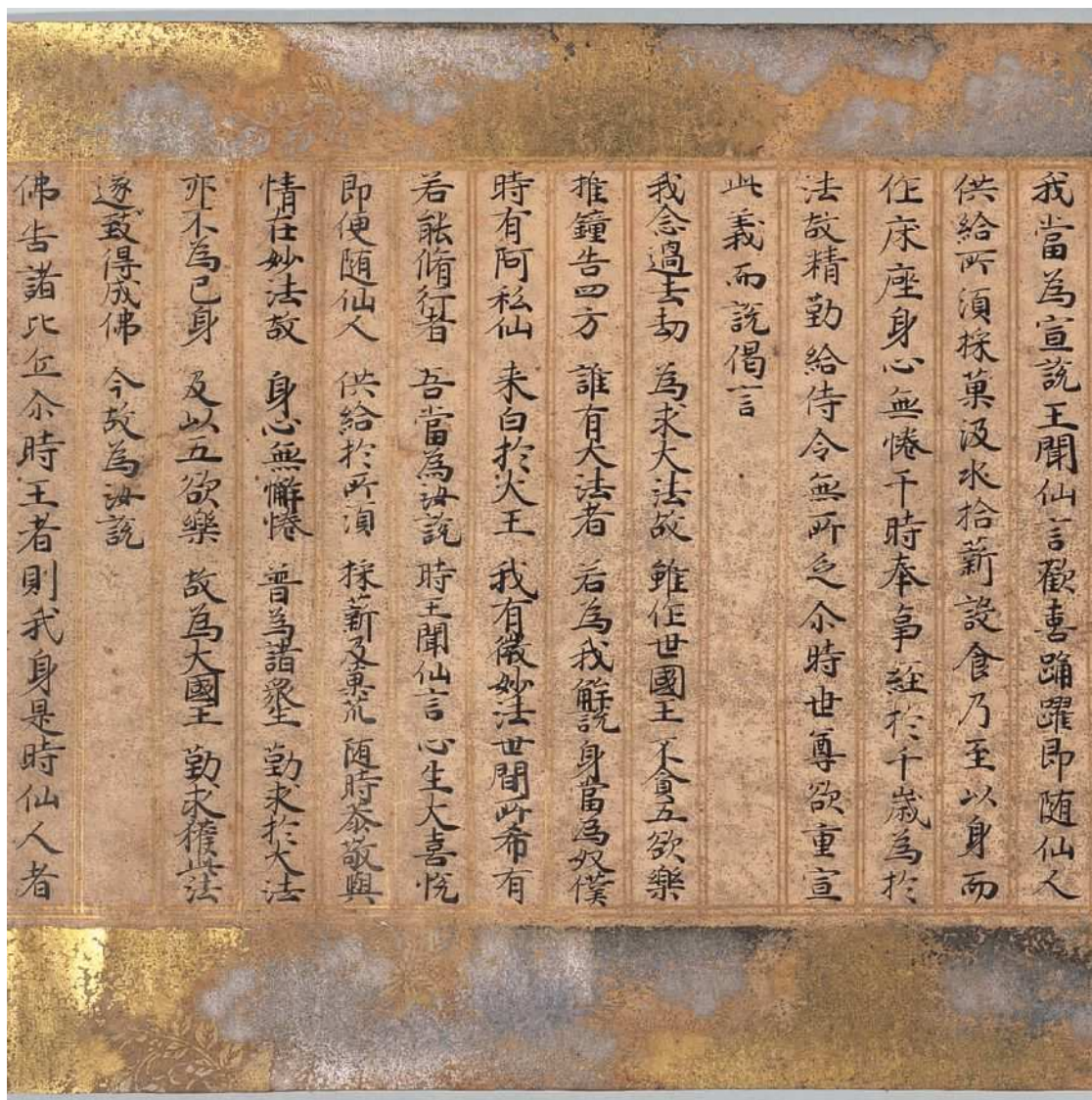


Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第61号

平成19年 4・5・6月



国宝 法華經〔提婆達多品第十二〕(部分) 奈良・長谷寺

特別展

神仏習合

—〈かみ〉と〈ほとけ〉が織りなす信仰と美—

4月7日(土)～5月27日(日)
東西新館

特別陳列

古玩逍遙

—服部和彦氏寄贈仏教工芸展—

6月9日(土)～7月8日(日)
西新館

平常展

仏教美術の名品

本館 平常開館
西新館 6月9日(土)～

中国古代青銅器

本館 平常開館

特別展

神仏習合

—「かみ」と「ほとけ」が

織りなす信仰と美—

4月7日(土)～5月27日(日)
東・西新館

主催／奈良国立博物館・朝日新聞社
後援／NHK奈良放送局
協力／日本航空・奈良テレビ放送・
日本香堂



◎山王宮曼荼羅(部分) 当館



融通念仏縁起絵巻(部分) シカゴ美術館

古代より日本人は、山河あるいは樹木など、さまざまな自然現象の中に神の存在を見いだしてきました。宗教観念の基層を形づくってきたこのような神々に対する信仰と、外来宗教である仏教が深く融合した信仰のあり方を、今日一般に「神仏習合」と呼んでいます。

「神仏習合」は奈良時代の国家仏教形成とともに著しく進展し、この頃から仏像の影響を受けながら、神の姿を造形化した神像も盛んに製作されるようになります。また中世に入ると、神は仏が人々の前に仮に顕れた姿であるとする垂迹説(すいじやく)の広まりとともに、個々の神に特定の本地仏が定められ、それを具体的に表す絵画などが盛んに作られました。

近年、日本の神に対する関心の高まりとともに、こうした「神仏習合」の姿を具体的に伝える造形遺品や文献史料の紹介が相次いでいます。本展は、これらの成果をふまえて、名品約二百十件を一堂に会し、「かみ」と「ほとけ」が紡ぎ出す美の世界を幅広く紹介するものです。

出陳品から



◎女神坐像(八幡三神像のうち) 広島・御調八幡宮
木造 素地 像高51・9cm 平安時代(9世紀)



◎女神坐像(八幡二神像のうち) 広島・御調八幡宮
木造 彩色 像高71・7cm 平安時代(9世紀)

三原市・御調八幡宮の本殿には、十世紀以前の制作にかかる、七軀の神像が祀られている。そのうち五軀は二組の八幡神像を構成している。一組は僧形の八幡神(応神天皇)と比売神(図版右)が一對をなす二神形式、もう一組は僧形八幡神が二体の女神(図版左はそのうちの一体)を伴う三神形式をとる。

八幡神の本社・宇佐八幡宮の祭神は、天平九年(七三七)の時点では二神(『続日本紀』)で、これに大帯姫(神功皇后)が加えられて三座となったのは、弘仁十四年(八三三)のことである。御調八幡宮の二組の八幡神像は、こうした奉祀形態の展開を反映している可能性があり、八幡信仰史上、非常に重要な意義をもつ。

この二体の女神像はともに全容が二木から彫出され、両手両足先を衣の中に包み隠し、右脚を立て膝にして坐す姿をとるが、作風は対照的である。一体は太い鼻梁、大ぶりの翻波式衣文など、平安初期の一本造の仏像に通ずる大胆かつ豪快な造形を示す。もう一体は若々しく豊かな像容で、親しみやすさと華やかさが感じられる。前者は九世紀前半から半ば、後者は九世紀末頃の作とみられ、社伝にいう御調八幡宮の創建年代(宝龜八年『七七』)までは遡らないが、初期の神像彫刻の中でも出色の秀作として注目される。

稲本泰生(当館企画室長)

特別陳列

古玩逍遙

服部和彦氏寄贈仏教工芸展

6月9日(土)～7月8日(日)
西新館



五尊懸仏

服部和彦氏は静岡県在住の実業家で、三十歳代半ばより古美術の世界に強く惹かれ、収集を行うようになりました。氏の古美術収集に大きな転機が訪れたのは、元奈良国立博物館館長の石田茂作氏との出会いでした。それ以後服部氏の収集は体系的に行われるようになり、中でも最も強く惹かれていた密教工芸分野では壇具の主要な法具を網羅するまでに成長し、川端康成旧蔵の金銅三鈷杵のような著名な作品を所蔵するまでになりました。

平成十七年、奈良国立博物館は服部氏より仏教工芸を中心に六十余件のコレクションの寄贈を受けました。その中には前述の金銅三鈷杵のほか、かつて五種鈴を構成していた金銅鈴・三鈷鈴・宝珠鈴、高麗時代の銅五大明王五鈷鈴といった貴重な作品も含まれています。また、金銅金剛盤や白銅五鈷鈴のように銘文を有する品もあり、資料的にも価値の高い作品が少なくありません。密教法具以外にも鏡像、懸仏、舍利容器、瓦経、仏像なども見ることができ、服部氏が広い視野で仏教美術を見つめていたことが伝わってきます。

「古玩逍遙」展は

寄贈品の中から仏教工芸四十件、彫刻三点、考古品六件を展示するものです。

服部和彦氏が逍遙された仏教工芸の世界をたどりながら、鑑賞の楽しみを発見していただければ幸いです。



銅五大明王五鈷鈴



金銅三鈷杵

予告

特別展

院政期の絵画 (仮称)

9月1日(土)～9月30日(日)

東・西新館

わが国の平安時代後期から鎌倉時代初期(いわゆる院政期)の絵画は、仏教思想を基調としつつ王権とも関わり、ゆたかな展開をとげています。この時代は、わが国の絵画史上で、もっとも美しい作品を生み出しつづけたと言っても過言ではありません。

この展覧会は、十一世紀から十三世紀初頭頃までのわが国の絵画史の一端を紹介し、仏画や絵巻物を制作した絵仏師と絵師あるいは能筆とも言うべき存在にも注目します。当時の人々が美をどのように探求したのか、美とどのように関わったかを考えるものです。美を創り出す工夫や、人々の意志の世界に迫ってみたいと思います。



●信貴山縁起〈飛倉巻〉(部分) 奈良・朝護孫子寺

親と子のギャラリー

色と彩 (仮称)

7月14日(土)～8月19日(日)

東新館

人々は古くから光や空気の移り変わりが映しだすさまざまな色を感じ、それらを愛で、ときに心情や思想を投影してきました。そして自らもいろいろな素材や技法を使って色を表現し、生活や信仰の場を彩ってきました。今年の親と子のギャラリーでは、さまざまなかたちに表現された美しい色とその技法に注目していきます。昨年に引き続いてデジタル映像を駆使しながら、色にまつわる表現の細部にも迫ります。目にも鮮やかな色彩の世界をお楽しみ下さい。



●刺繍釈迦説法図(部分) 当館

特別陳列

文化庁新収品展

7月14日(土)～8月19日(日)

西新館

なんてんてつとう 南天鉄塔のかたち

わが国には実に様々な種類の塔が存在する。もっともなじみ深いものは五重塔や三重塔に代表される層塔であるが、ほかに多宝塔、宝塔、宝篋印塔、五輪塔、国東塔、相輪塔などを挙げることができる（宝塔は多宝塔の初層の屋根がないタイプをいい、工芸品に多く見られる）。もともと塔は仏教の開祖、釈迦の遺骨を納めるストゥーパに起源があるが、インドにおいても時代の変遷とともにストゥーパに形式の変遷が見られ、さらに仏教が中国、朝鮮半島へと伝播する過程でその土地の建築スタイルを吸収している。仏教東伝の終点である日本の塔は、インドのストゥーパとはおよそ似ても似つかないものになつていると思われる。

わが国の塔の中でひとときユニークな存在に多宝塔がある。塔は本来釈迦の遺骨である舍利を安置するが、多宝塔は大日如来を安置する。多宝塔の初層は円筒形で上部を半球形に作るが、木造建築を得意とする日本ではかなり無理をした造形である。しかも、基本的に多宝塔は密教寺院のものであり、他の層塔とは異なる系譜にある。

実は多宝塔は南天鉄塔という南インドにあつたとされる塔を模しているのである。この塔には大日如来の教えを記した経典が納められているとされ、それをインド僧の龍猛が鉄塔を開いて学びとり、数代を経て弘法大師空海に継承されたと伝えられている。いわば南天鉄塔は真言密教の原点ともいえるべき聖地である。南天鉄塔の形がどのよ



①南天鉄塔図（『覚禅抄』巻百二十三、
『大正新修大蔵経 図像 第五巻』より）



②サンチー第1塔

うに考えられていたかは『覚禅抄』巻一二三の「南天鉄塔図」などから知ることができる。それによれば、初層は円筒形で上部が半球形であり、二層目の上に宝形造の屋根をのせ、相輪を頂くという姿であつた。わが国の一般



③アジャンタ第19窟



④奉献塔（ラトナギリ）

的な多宝塔は初層に屋根を設ける点がこの図とは異なっているが、これは初層を雨水から守るという実際の建造物としての必要性があつたからであらう。ちなみに、工芸品として南天鉄塔を製作する場合は初層の屋根は不要であり、奈良・西大寺の金銅宝塔や鉄宝塔に代表される中世の宝塔は「南天鉄塔図」とほぼ変わらぬ姿で作られている。

では、「南天鉄塔図」の形式は何らかの典拠があるのであろうか？南天鉄塔における密教相承の話は説話的要素が強いため、南天鉄塔そのものも空想の産物と思えても無理はないところであらう。しかし、七世紀頃のインドの後期ストゥーパを見てみると、「南天鉄塔図」との共通点をいくつも見いだすことができるのである。もともとインドにおけるストゥーパはサンチー第一塔（紀元前三世紀）のような低い円形基壇に半球形の塔身を被せ、その上に平頭、傘蓋を頂く形式であつた。やがて時代を経るとともに円形基壇は高さを増し、全体の形は円筒形の上に半球を被せたような形になる。さらにアジャンタ第一九窟のチャイティヤ窟（七世紀）に見るように円筒形の塔身の前面に仏像を表した例も登場する。また、オリッサ州のラトナギリ遺跡には七世紀前後の小さな奉獻塔が多数見られるが、その中には平頭が屋根を思わせるカーブを持ち、日本の塔の九輪を彷彿させる傘蓋を有する例も見ることができる。もし、平頭が屋根のように大きくなれば、南天鉄塔図とさほど変わらない造形が現れることになる。

もちろん、南天鉄塔が実在したと公言するつもりはないが、わが国に普及した多宝塔や宝塔が意外にもインドの後期ストゥーパの形をよく継承していることは興味深い事実として受けとめてよいであらう。あるいは、南天鉄塔がインドに具体的なモデルを有していたのではないかという空想さえ膨らんできそうだ。

内藤 栄（当館工芸考古室長）



鑑 当館（坂本コレクション）



○阿弥陀如来立像 善光寺



方形三尊傳仏 明日香村



○大黒天立像 西大寺



○誕生釈迦仏立像・灌仏盤 東大寺

彫刻

平楽展

仏教美術の名品

本館第1、13室

第1室

【大和の仏たち】●木造多聞天立像（法隆寺）、●木造薬師如来立像（元興寺）、●木造虚空藏菩薩坐像（北僧坊）、●木造十一面観音立像（松尾寺）、●脱活乾漆・木造梵天立像、●脱活乾漆・木造救脱菩薩立像（以上、秋篠寺）、●木造持国天立像、●木造多聞天立像、●木造西大門勒額（以上、東大寺）、●脱活乾漆舍利弗立像、●脱活乾漆目健連立像、●脱活乾漆緊那羅立像（以上、興福寺）、●木心乾漆伝義淵僧止坐像（岡寺）、●木心乾漆阿閼如来坐像（西大寺）
●木造紅玻璃阿弥陀坐像（當麻寺）、●木造伝行賀坐像（興福寺）、●木造十一面観音立像（勝林寺）、●木造十一面観音立像（地福寺）（4月15日）、●銅造誕生釈迦仏立像・灌仏盤（東大寺）（4月17日）、●木心乾漆文殊菩薩坐像（薬師寺）、●木造菩薩立像（金竜寺）、●木造大黒天立像（興福寺）、●木造大黒天立像（西大寺）

【注目の逸品】木造如来立像（当館）（4月15日）、●木造聖観音立像（観心寺）（4月17日）

【興福寺伝来の四天王像】●木造増長天立像（当館）、●木造広目天立像（興福寺）、●木造多聞天立像（当館）

【観音菩薩】●木造十一面観音立像（薬師寺）、●木造千手観音立像（園城寺）、●木造千手観音立像（妙法院）、●木造十一面観音立像（元興寺）

【迎講の阿弥陀仏】●木造阿弥陀如来立像（浄土寺）

第3室

【仏の莊嚴】●木心乾漆光背、木造蓮弁（以上、聖林寺）、木造蓮台（十輪寺）、銅造光背（当館）、●木造光背（當麻寺）、●木造仏坐像（光背化仏）、●木造飛天（以上、興福寺）、●木造阿弥陀如来像台座（金堂西の間所用）、●木造天蓋（金堂西の間所用）（以上、法隆寺）

【注目の逸品】

観音菩薩立像

大阪・観心寺

木造 彩色 像高六六・五cm
平安時代（十世紀）
重要文化財



密教系の円筒形の宝冠を付けた観音菩薩で、この種の像は平安中期の菩薩像に遺例が多い。観心寺には同類の像が五体残っている。本像は両腕半ばを含み、櫃の材から彫刻され、後頭部と体部背面から内列りを施す。大きな眉目と小さな顎で構成された顔つきは、同寺本尊の如意輪観音像のような真言密教系彫像の余風を止めており、重心を低く取った重厚な体型や鰭波式衣文の浅い彫り口などから十世紀前半を降らぬ作とみられる。本尊像の密教的な文様構成による彩色文様なども簡略化されながら継承されている。

鈴木喜博（当館上席研究員）

寺）

第4室

【ガンダーラの彫刻】石造菩薩立像、石造仏伝図浮彫（以上、当館）
【中国石窟寺院の仏像】石造如来頭部（雲岡）、石造菩薩頭部（章皇）、石造菩薩頭部（響堂山）、石造螺髻像頭部（響堂山）（以上、個人）

【中国・朝鮮半島の金銅仏】銅造二仏並坐像（当館）、銅造誕生釈迦仏立像、銅造押出五尊仏、銅造供養者坐像、銅造観音菩薩立像、銅造力士立像、銅造力士立像（以上、個人）、銅造如来立像（光明寺）、銅造如来立像（当館）

第5・6室

【中国の仏像】木造菩薩坐像、石造仏坐像、●木造諸尊仏龕（以上、個人）、●石造十一面観音立像、●石造三尊仏龕（以上、当館）、●石造三尊仏龕、石造仏五尊碑像、石造仏立像、石造浄土碑像（以上、個人）

第7室

【伎楽面】●伎楽面（力士 太孤父・醉胡徒・崑崙）（4月15日）、同（治道・迦楼羅・醉胡徒・崑崙）（4月17日）（東大寺）

第8室

【金銅仏】●銅板法華説相図（長谷寺）、●銅造薬師如来坐像、銅造観音菩薩立像（4月15日）（以上、当館）、●銅造菩薩立像（法起寺）、●銅造観音菩薩立像（法隆寺）、●

銅造菩薩半跏像（東大寺）、●銅造観音菩薩立像（金剛寺）、●銅造誕生釈迦仏立像（正眼寺）（4月15日）、●銅造誕生釈迦仏立像（悟真寺）（4月15日）、●銅造薬師如来坐像（般若寺）（4月15日）、●銅造釈迦如来坐像（園城寺）（4月15日）、●銅造誕生釈迦仏立像（薬師寺）（4月15日）、●銅造金剛童子立像（当館）（4月15日）、●銅造蔵王権現立像（大峯山寺）（4月15日）

【特集展示 塑像と埴仏】4月17日

●塑像断片（奈良県薬師寺西塔出土）、●塑造人物頭部（奈良県奈良薬師寺出土）（以上、薬師寺）、●塑造菩薩頭部（奈良県奈良寺出土）（当館）、●塑像断片（奈良県奈良寺出土）（明日香村）、●塑像断片（滋賀県雪野寺出土）（個人）、●塑像断片（鳥取県尾尾寺出土）、●火頭形三尊埴仏（伝奈良県橘寺出土）（以上、当館）、方形三尊埴仏（奈良県川原寺裏山出土）（明日香村）、六角形埴仏（三重県天華寺跡出土）、小型独尊埴仏（三重県夏見庵寺出土）、方形独尊坐像埴仏（中国出土）（以上、当館、多宝塔埴仏（中国）（個人）

第9室

【釈迦如来】木造釈迦如来坐像（法隆寺）、●木造釈迦如来坐像（東大寺）、木造山山釈迦立像、●木造釈迦如来立像（清涼寺式）（以上、当館）、●木造仏涅槃像（照源寺）
【阿弥陀如来】木造阿弥陀如来坐像（当館）、木造阿弥陀三尊像（峰定寺）、木造阿弥陀如来立像（東大寺）、木造阿弥陀如来坐像（西

大寺）、●銅造阿弥陀如来立像（善光寺）

第10室

【地藏菩薩】木造地藏菩薩立像（十市町自治会）、●木造地藏菩薩立像（大福寺）、木造地藏菩薩立像（新薬師寺）、●木造地藏菩薩立像（長命寺）

第11室

【大日如来】木造大日如来坐像（元興寺町）、木造大日如来坐像（西城戸町）
【弥勒菩薩】木造弥勒菩薩立像（林小路町）、木造弥勒菩薩坐像（薬師寺）
【神像】木造男神像（当館）、木造男神像（観音寺）
【聖徳太子像】●木造聖徳太子立像（成福寺）、木造南無仏太子像（法起寺）

第12室

【動物彫刻】●木造狛犬（手向山八幡宮）、●木造狛犬、●木造獅子、木造獅子（以上、当館）

第13室

【明王像】木造大明王像（当館）、銅造不動明王立像（当館）、●木造不動明王坐像（正寿院）、木造不動明王立像（個人）、●木造愛染明王坐像（当館）
【天部像】●木造十二神将立像（辰・未（室生寺）、木造毘沙門天立像、木造伝大黒天立像（以上、当館）、●木造増長天立像（法明寺）



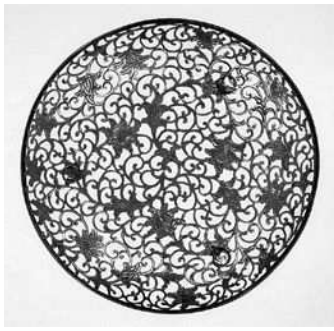
明月記断簡 当館



●慧思像(天台高僧像のうち) 一乗寺



○瑠瑠螺鈿菊唐草文念珠箱 當麻寺



●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠 神照寺



瓦経(飯盛山経塚出土) 当館

【特集展示 僧侶の道具】
●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

工芸

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

考古

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

書跡

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

絵画

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

●金銀鍍透彫宝相華唐草文華籠(神照寺)、
●紙胎漆塗華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海

【表紙写真解説】

国宝 法華経(長谷寺)

法華経28巻に開結経・般若心経等を加えた計34巻からなる經典。鎌倉時代前期を代表する装飾経で、界線は金泥で二重に引き、上下の界外には金銀の霞文様を描いて金銀箔を散らし、さらに一部の巻には金銀泥で草花の文様が描かれる。贅を凝らした料紙の装丁は、製作当初の姿をほぼそのまま留め、しかも全巻がセットで伝わっている点で、たいへん貴重なものである。

●国宝 ●重要文化財

以上すべての展示において、出陳作品を一部変更する場合があります。

パネル展示

パネル展示

地下回廊

光学的調査

修復文化財

地下回廊

平常展

中国古代青銅器 坂本コレクション

本館第14・15室

● 展覧会日程 ●			
	4 月	5 月	6 月
本 館	平常展(彫刻)・(中国古代青銅器)		
東 新 館			
西 新 館	特別展 神仏習合 ―かみとくほとけが織りなす信仰と美― (4/7~5/27)		
	特別陳列 古玩遺選 服部和彦氏寄贈仏教工芸展 (6/9~7/8)		
	平常展(絵画・書跡・工芸・考古) (6/9~)		

展示評

特別陳列

「おん祭と春日信仰の美術」

郷司 泰仁
(比叡山延暦寺国宝殿学芸員)



私は垂迹画を主たる研究テーマとしており、今回の奈良博の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」も半分義務と思いつつも楽しみにして、十二月上旬と二月半ばの二度、展示替えを挟んで訪れる機会を得た。春日は垂迹関係を研究する者にとっては欠かせない領域である。

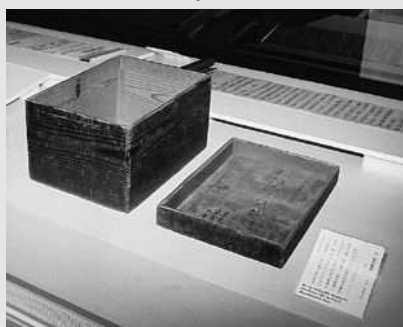
奈良博では以前、「春日大社名宝展」(一九九五年)や「春日信仰の美術」(一九九七年)、「大和の神々と美術 舞楽面と馬具と中心に」(一九九九年)など春日に関する展覧会を開催しており、それらに続く奈良博の日頃の研究成果が発揮される展示といえる。そのことは図録を見て頂ければ一日瞭然であろう。今回は春日若宮の大祭「おん祭」をメインテーマとし、「若宮誕生」、「若宮様のおん祭」、「春日信仰の種々相」の三部構成であった。近年では巡回展「興福寺国宝展」(二〇〇四〜二〇〇五年)などが開催され、春日曼荼羅を目にした方も多いのではなかろうか。今回の展示でも多くの春日曼荼羅が出陳され、その諸相を分かつて頂けたと思う。南市町自治会所蔵の春日宮曼荼羅は、いつ観てもその大きさと華麗さに圧倒される。また、今回は新たに「春日若宮曼荼羅」が紹介されており、まだこのような未公開の作品があったのかと思ひ知らされた。この作品は解説にあるごとく、どのような場面を絵画化したものか不明である。制作当

時は人々の共通認識で分かっていたものも、今日の我々には分からないというのは何とも歯がゆい。

おん祭の部分は舞楽部分に焦点をあて、面や装束、祭りを絵画化したものが出陳されていた。欲をいうならば、「若宮祭礼記」、「春日若宮御祭礼略記」などの史料が充実し、史料面からの裏付けが出来ればと感ぜられた。また、祭りの行程は写真パネルでの展示であったが、私のようなおん祭を実見していない人、馴染みのない人にとっては、やや分かりにくいように思われた。映像展示でもあれば祭りの行程も容易に理解でき、その風流さ・臨場感がダイレクトに伝えられたであろう。「春日信仰の種々相」は春日信仰の多様性が凝縮された展示であったが、特に私が注目したのは「春日講」である。今でも各々の講で本尊とされている曼荼羅が出陳され、今日でも続く春日信仰の一端を垣間見ることが出来る。しかも、制作年代の上がるものが多いことには驚きである。これも春日講を今まで行ってきた町の人々の賜物であろうか。展観では曼荼羅と文書のみであったが、諸道具なども一緒に展示し、春日講のしつらえを再現してもらえれば、より「層」に「今に続く」を強調できたのではなかろうか。

奈良博では今年の四月七日(土)から五月二七日(日)まで「神仏習合—

〈かみ〉と〈ほとけ〉が織りなす信仰と美—」が開催される。今回の特別展の成果も踏まえられるところであろう。今年春の注目すべき展覧会のひとつである。



●公開講座●

●特別展 神仏習合 〈かみ〉と〈ほとけ〉が織りなす信仰と美

- 4月21日(土) 「神仏習合の論理と造像—インド・中国から日本へ」
稲本泰生(当館企画室長)
- 4月28日(土) 「本地垂迹の美術」
谷口耕生(当館研究員)
- 5月12日(土) 「黎明期の神像」
伊東史朗(元文化庁主任文化財調査官)
- 5月19日(土) 「中世神道と神道灌頂」
伊藤 聡(茨城大学教授)

※各回とも午後1時30分〜3時(開場は午後1時)、当館講堂にて。聴講無料。
定員200名。午後1時より講堂入口で整理券を配布します。

●サンデー・トーク●

- 4月15日(日) 「奈良時代の神仏習合」
野尻忠(当館研究員)
- 5月20日(日) 「聖地に宿る神仏」
清水健(当館研究員)
- 6月17日(日) 「瓦経—土に刻まれたお経」
永井洋之(当館研究員)

※各回とも午後2時〜3時(開場は午後1時30分)、当館講堂にて。聴講無料。

●奈良国立博物館賛助会員

2007年3月末現在、個人会員20名、団体会員10団体、特別賛助会員5団体のご登録を頂いております。

新規会員となられた方のご芳名をあげさせていただきます。

【特別会員】 株式会社 田 建 様

*賛助会員に関するお問い合わせは、
奈良国立博物館 渉外課 賛助会員担当まで。

◆キャンパスメンバーズ

奈良国立博物館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生および引率教職員は平常展については無料、特別展については団体料金で観覧できます。(学生証及び引率教職員は身分証明書の提示をお願いいたします。)

なお、現在、加入いただいている大学は次のとおりです。

奈良教育大学 帝塚山大学(帝塚山高校含む)
奈良女子大学 龍谷大学 京都嵯峨芸術大学
大阪教育大学 京都精華大学 京都橘大学 京都大学
近畿大学文芸学部 奈良産業大学
奈良文化女子短期大学付属高等学校 奈良学園高等学校
奈良佐保短期大学 (順不同)

*キャンパスメンバーズに関するお問い合わせは、
奈良国立博物館 渉外課 キャンパスメンバーズ担当まで。

け こ 華籠

愛知・万徳寺
紙胎 漆塗 彩色 径24.0cm
鎌倉時代(14世紀)
重要文化財



華籠とは、散華供養に用いる花を盛るための器である。散華供養とは、花を散らしてほとけを供養したり、花の芳香によって悪鬼を退散させ、法会を行う道場を清め、ほとけをすみやかに招き入れるために行われる儀礼である。四箇法要(密教の場合は二箇)という大法会の際に必ず行われる法会の作法にも入っており、四句の偈(仏教の教えや仏・菩薩の徳を讃える詩句)を節をつけて唱えながら花卉を撒く姿はおなじみのものとなっている。生花を撒くのが本義であったが、後に紙製の花卉を用いるのが通例となり、各寺により工夫されたものが現在是用いられている。華籠は、はじめ竹で編んだ簡素な籠であったとみられ正倉院宝物中にも例があるが(南倉42)、次第に装飾的なものが作られるに至ったものと思われ、後世には耐久性のある金属製のものが盛行した。

本品は、愛知県稲沢市の万徳寺に6面伝わるうちの1面。木型に10枚前後の紙を張り重ねて成形した後に型を抜き、上に漆を塗り重ねて仕上げる張抜技法で作られた華籠で、非常に軽い。花卉と三鈷杵と縁とで囲まれる部分は切り透かされ、籠らしい雰囲気を示している。花を盛る内側には白土下地を施した上に美しい彩色が施され、八弁の紅蓮華が全面に表されている。花卉の間には金箔を押して墨で輪郭を描いた三鈷杵が顔をのぞかせており、花卉の赤、蓮肉と周囲の緑、三鈷杵の金の色彩対比が美しい。また薬や花卉のつけ根近くの淡紅色もアクセントになっており、全体に優美なまとまりをみせている。

なお、本品の意匠は、実は両界曼荼羅の一つ胎藏曼荼羅の中心部分、即ち中台八葉院を抜き出したものである。本品の伝わる万徳寺は真言の古刹であり、こうした密教色の濃いデザインが採用されたのは、そのような宗教的環境によるものであろう。

清水 健(当館研究員)
西新館 6月9日(土)～7月8日(日)

平常展の みどころ

ふ どうみょうおう ず ぞう 不動明王図像

奈良国立博物館
紙本白描 縦30.5cm 長1,232cm
鎌倉時代 寛元3年(1245)
重要文化財



密教僧による図像の集成活動の一つの成果。18種類の不動明王を列挙し、その後に不動の従者である八大童子を2種と、薬師呪および俱哩迦羅龍王を収載して1巻をなしている。

原本の製作時期や筆者については資料がないが、高野山で得たという注記のある図像が数点含まれていることから、原本の筆者は真言僧と考えられる。その他にも既存の図を写したのがあるほか、一般に行われていない形の像も集めようとして、「私図之」すなわち原本の筆者自らが經典の記述に基づいて形にした図もあり、筆者がかなり絵画の技能に長けていたことが窺われる。奥書によれば、寛元3年に兼胤という天台僧が、師に従って一時鎌倉に滞在していた間に名越の或る寺で、やはり当時鎌倉にいた、師の師にあたる功德院僧正快雅の所持本を書写したことが、考証により明らかにされている。このとき兼胤は、出家後すでに14年になるものの、まだ26歳の若さであり、同年に大部の図像の書写も行い研鑽に努めていたことが知られている。この1巻に収められた図には、像の肉身の立体感や、着衣の流れるような衣文線、軽やかな火炎のなびきなど、軽快な筆致による生き生きした表現が見られるところから、おそらく原本の形を正確に写すに留まらず、独自の絵画的感覚が盛り込まれているのではないかと見受けられる。もとは同じ原本に発する、正応5年(1292)に頼尊という僧が転写した、東寺伝来本(『大正新修大藏經図像第6巻』所収)と比べても、この図像の闊達な筆力は秀でており、絹本著色の作品に劣らぬ、白描図像独特の清々しい美しさを備えている。

中島 博(当館情報サービス室長)
西新館 6月9日(土)～7月8日(日)

開館予定(4月～6月)

■開館時間

午前9時30分～午後5時(4月13日以降の毎週金曜日は午後7時まで)
※いずれも入館は閉館の30分前まで

■休館日

月曜日(ただし4月30日は開館)
※5月1日(火)は休日の翌日ですが、開館します。

観覧料金

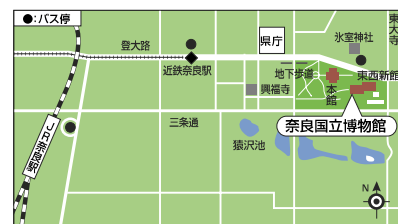
特別展「神仏習合ーくかみ」とくほとけが織りなす信仰と美ー

	大人	高校・大学生	中学生以下
当日	1,000円	700円	無料
前売	900円	600円	
団体	900円	600円	

平常展・特別陳列

	大人	高校・大学生	中学生以下
一般	500円	250円	無料
団体	400円	200円	

団体は責任者が引率する20名以上



(交通案内) 近鉄奈良駅下車徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用下さい。

 **奈良国立博物館**
Nara National Museum

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒(90円切手貼付、宛名明記)を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。